

名和隆央教授記念号に寄せて

名和隆央先生は、1971年立教大学経済学部経済学科に入学され、1976年に本学経済学研究科に進学されました。1982年から85年まで本学部助手を勤められました。高千穂商科大学および本学部非常勤講師を勤められた後、1990年に本学専任講師に着任され、93年に助教授、2003年に教授に昇格されました。2017年3月本学を定年退職されました。学生として本学に入学から定年退職まで46年の長きにわたって立教大学および経済学部と関係を持たれ、多大な貢献をされました。その間、全学の委員として入試統計委員長、全力り総合部会長、評議員などを歴任されました。また、経済学部の委員として経済学科長、学部教育制度検討会、研究体制検討会、将来構想委員会などの委員を務められました。

名和先生は、日本型産業組織がもたらす効率性やそれが孕む問題性に関心を寄せられ、研究をされてきました。日本の下請系列関係について、浅沼萬里氏らの研究を批判的に吟味されました。その際、コース、ウィリアムソンらの新制度学派とマルクス経済学の両者を橋渡しする視点から、比較制度論、比較組織論のアプローチを発展させ、分析されてきました。そこでは「社会的分業」と「企業内分業」は規制の原理が異なるにもかかわらず、コースらの取引コスト論は原理の違いを考慮していないことを指摘され、生産要素の取引の内部化と外部化という概念を提示し、日本の産業組織の下請制、系列化などを説明されました。一連の論考をまとめられ、2010年に『日本型産業組織の制度分析』（泉文堂）を著されました。本書は学界の遺産として読み継がれるでしょう。

先生は、経済学部の基幹科目である「工業経済論」（2006年度より「産業経済論」と改称）、を担当されてきました。そこでは日本の産業組織の効率性と競争力の諸要因を明らかにされただけではなく、競争力の強い経済が、必ずしも「国民生活の「豊かさ」」を実現していないことに注目し、産業構造や生産組織のあり方を構想されてきました。また、一年生を対象とした科目「基礎演習」（「基礎ゼミナール」）および「経済学」も長年にわたりご担当され、その成果として2004年に『経済学入門コース：経済の不思議に答える』（緑風出版）を著されました。私も当時「基礎演習」を担当しており、このご著書を教科書として使用させていただきましたが、経済学の魅力を初学者に理解させる工夫がなされており、大変有益であったことを覚えております。

本学部での長年のご経験から、先生は学部の歴史やカリキュラムの変遷について大変詳しく、経済学部の 知恵袋 として、私たちを導いて下さいました。私は学部教育制度検討会で先生とご一緒する機会が何度かありましたが、先生の記憶力の素晴らしさと、過去の経緯を踏まえ

た的確なご発言にいつも驚かされました。また、先生と私は経済学部で同じ政策部会（後に国際・政策部会）に属していたため、長年にわたって一緒に仕事をさせていただきました。先生は何度も政策部会の座長を務められ、2006年経済政策学科の立ち上げとその後の運営に多大なる貢献をされました。さらに、2002年度から2005年度の4年間全カリ総合部会長に着任されました。私は経済学部選出の全カリ総合委員として先生の下で仕事をしましたが、様々な学部の要望や意見、多数の科目の編成などをリーダーシップを発揮して見事に運営されました。

先生と私は同じ社会政策学会に所属し、2005年に立教大学で同学会の大会が開催されたときは、井上雅雄先生とともに大会を成功裏に導いて下さいました。また、先生と私は川越に住んでいるため、東上線で一緒に帰ることがありました。その時、先生しかご存知ない立教大学の昔のエピソードをよくお話し下さいました。美声で楽しくお話をされ、その興味深い内容に時間が経つのが短く感じられました。

名和先生の長年にわたる本学へのご貢献に感謝し、ここに先生の記念号を刊行させていただきます。

2018年2月

経済学部長 菅沼 隆